

自己の問題意識を高めるための読みの指導の試み

—— 古典文学作品の読解を通して ——

高尾香織

1 主題設定の理由

多くの生徒たちは、さまざまな事象に対する問題意識が希薄になつている傾向があるように思う。その一つの原因として、物事を対象化して見る、さらには考えるところという機会がなく、そのためそういった自覚や意識までもが乏しくなつていのではないかと考えられる。

そこで、文学作品を通して、そこに描かれている登場人物の心情や設定されている環境を一つの典型例として対象化させ、その中に見られる問題を自分に引き付けて考えさせる、あるいは自分の生活経験と照らし合わせることによって、自分の内面や自分をとり巻く環境の中に潜む問題に気づかせようとしたのがこの試みである。

作品として古典を取り上げた理由は、古典には時を越えて私達の心に響く真理や人間の生きる姿が見いだされるからである。おそらくそれらの中には、現代の高校生にも通ずるものがあるはずで、古典という一見自分たちとは懸け離れていると思われる世界が、実は自分たちの身近な問題に深く関わっていることを生徒達

が実感できるとするならば、それは彼らにとっては非常に新鮮な体験をすることになると考えた。

以上のことから、「自己の問題意識を高めるための古典作品の読み」を本研究の主題とした。

2 生徒の実態調査および調査結果をふまえての仮説設定

昨年、前任校（広島県立大門高等学校）で担当した三年生文系古典二クラス七十一名に対してアンケートを行った。

（回答者五十三名、回答率75%）

1	あなたは古典が好きですか。	好き どちらでもない 嫌い	18名 19名 16名
2	古典の授業が現代の自分の生活に役に立っていると思いますか	思う 思わない	13名 40名
3	今までに古典の授業でおもしろかったものがありますか	ある ない	35名 18名

文系の生徒でもはつきりと古典が好きだという生徒は全体の中でも二割強ほどにすぎず、古典の授業（学習）が現代の自分たちの生活に役に立っていると思うものは全体の二割を下る。しかし、役に立つと答えた生徒の回答の中に次のような例が見られた。

・何世紀も昔の人でも、人を恋しく思う気持ちや風流のあるものに心を奪われたりする心は、現代の私達と変わりがないのだからと実感できるのは素敵なことだと思う。

・役立つというか、昔の生活と比べてすごい変化があつて新しい発見ができる。

・時々、古典でやったようなことが新聞やTVなどで出てたりすると、そういうえばこれやっただけと思つたりする。

・普段の会話の中で知識として使えるものがある。

これらの生徒の意見を見ると、程度の差こそあれ、古典の世界が現代の自分たちの生活と切り離されたものではなく、実は相通ずるものがあることを認識できる素養があると言える。また現代の生活と異なる部分を発見することによつて古典を批評的に読む可能性があるとも言える。このような生徒の動向は、今までの古典の学習の中でおもしろかつたものがあると答えた中にも見られた。

・『大鏡』「村上天皇と中宮安子」

…中宮安子が嫉妬心をあらわにする部分。そして安子とのやりとりの中で天皇の中宮に対する愛情が感じられる。その二人の

関係を知っていくうちに興味がひかれていった。

・『史記』「鴻門の会」

…これに限つたことではないが、歴史とつながっている所の話がおもしろい。特に鴻門の会の宴の会場に乱入してきた劉邦の家の男気が惚れた。

・『源氏物語』「光る君の誕生（桐壺）」「小柴垣のもと（若紫）」

…光源氏の境遇から全てにおいて、人と人との関係、話の内容的にも面白いと思う。

・『雑説』（韓愈「伯樂」）

…当時の中国のことだけでなく、今現在のことにも言えることだと思ふから、色々考えさせられる。

以上のような生徒実態をふまえて次のような仮説を設定した。

一 情報を提供しながら古典のいいな解釈を試みることによつて生徒達は現代の自分たちの問題にひきつけて読むことができる

二 古典を批評的に読むことによつて新たな問題意識を持つことができる

3 検証授業

(1) 教材選択の理由

教材名 「帝の嘆き」(『源氏物語』「桐壺」より)

※使用テキスト 第一学習社 古典II 古文編

前任校の授業計画として、二年時に「桐壺」の冒頭部の学習を終え、三年時では桐壺の更衣の死後、帝が悲嘆に暮れている場面を学習することになっている。

この場面は、帝と更衣の愛が当時の身分制度の中では許されなかつたものであつたばかりに更衣を死に至らしめたという社会的な問題を軸として、男女の愛憎の問題や残された子供の問題などに発展させて考えることのできる教材である。

本文中の主な登場人物は、桐壺帝、更衣の母君、靱負の命婦、弘徽殿の女御らであるが、更衣の死を通してそれぞれの人物の心情が浮かび上がってくる。たとえば、最愛の者を失つた悲しみ、顧みられることになつた女の嫉妬や辛さ、残された子供に対する不安などが挙げられるが、いずれにしても現代に生きる私達にも十分理解し得るものである。

また、帝と更衣の愛を阻んだ最大の要因である身分制度に対して、現代的な価値観から批判的に考えることも可能である。これは二年時の学習を想起させることによって、学習内容の深まりも期待できる。

以上のような点から、古典作品の読解を通して、現代に通じる問題を明らかにし、自己の問題に引き付けて考えるのに適した教

材と考え、授業を展開することにした。

(2) 授業の展開

対象 大門高校三年生 文系クラス(二クラス)

展 開	具 体 的 な 内 容
<p>〔第1次〕本文の読解 (1/6~4/6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・難語句や文法事項に注意しながら解釈をしていく ・二年時での学習を思い出させながら、人物関係などを正しく把握させる ・「長恨歌」やその他の和歌などの引用の効果にも触れる
<p>〔第2次〕論述 「あなたは○○に 共感できますか」 (5/6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主要登場人物の桐壺帝、更衣の母君、弘徽殿の女御の三者について「共感できる・共感できない」のいずれかの立場から論述させる。(全部でB5用紙1枚程度にまとめる)
<p>〔第3次〕論述 「あらためて 考えたこと」 (6/6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前回に出された意見をまとめたものを生徒に提示し、今回は時代背景なども考慮したり、現代的な視点から批判してみるなど、自由に論述させる。

〔第1次〕の本文の読解では、書き込み可能なプリントを使用した。これは他の教材でも同様のものを使ってきたのだが、文法事項や現代語訳を書き込めるもので、個人学習にも対応できるも

のである。さらに今回は、「源氏物語を読むためのちよつとした資料集」なるものを作成した。人物関係図や作中人物についての詳細な解説、「長恨歌」の全文と現代語訳（漢文のテキストに載せられていたもの）を示したものが、これは、大多数の生徒達が古文の学習で人物関係の把握というのが苦手であるので、読解の参考になるものと思って作成し、授業に必ず持参するように指示した。

《第2次》の論述では、本文の読解を一通り終えた段階で、それぞれの人物の置かれている状況をどれだけ把握しているか、自己確認させることがねらいであった。それぞれの人物が本文中、および二次次に学習した「桐壺」の冒頭部分でどのように描かれていたかをまとめたものを提示し、その後「共感できる」「共感できない」のいずれかの立場から、きちんとした理由付けをして述べるように指示した。

《第3次》の論述では、他の生徒の意見の中に、自分が思いもしなかった意見や同意見でもいろんな視点から理由付けされているのを見て、改めてこの作品本文に書かれている内容を考えさせることをねらいとした。量・形式とも自由に論述させた。

4 生徒の反応の分析

(1) 《第2次》での論述の分析

《第2次》において、桐壺帝、更衣の母君、弘徽殿の女御の三人について「共感できる」「共感できない」のいずれかの立場か

ら論述させた。出てきた意見の中から代表的な例になるものを取り上げて分析する。

◇桐壺帝に共感できる（三十六名）

- ・自分がとても愛している人が、自分をおいて死んでしまうことはとても悲しくてつらいことであるし、当時の身分制度を無視したために更衣が他の妃から恨まれて死んだのだから、きっと帝は自分に更衣が死んだ責任があると思っっているだろうから。
- ・桐壺帝の溺愛のせいで亡くなった更衣であるし、帝の身勝手な愛情によって周囲の者たちは惑いもあつたと思うが帝が更衣を愛する気持ちはどうしようもないものであり、光る君をかかわるのも帝に言わせれば当然のこと。愛する人を失った悲しみは帝であれ、他の人であれ同じように深く苦しいもの。一人の女性をそれほどまでに愛した帝をすごいと思う。
- ・更衣が亡くなったことは悲しいと思う。そしてさらに、更衣が他の妃から妬まれて精神的につらかった時に、守ってやれなかったというようなことが悔しいと思う。

◇桐壺帝に共感できない（十九名）

- ・桐壺の更衣のことを愛していたのは分かるが、自分の立場をわきまえていない。ただでさえ桐壺の更衣はパッシングを受けていたのに、彼女を守るどころか、よりパッシングされる材料を与えている。桐壺の更衣を愛している気持ただけで、周囲を見ることができなかったのがこの帝の愚かなところだと思う。
- ・更衣一人を溺愛するのはこの時勢ではあまりに自分の思いばかり

りを優先しすぎた行為だと思った。帝というものは一人一人の女御に同じほどの愛を分け与えないといけない時代、それなのに一人の女御に片寄るのはあまりにも行き過ぎた行為である。

・弘徽殿の女御の気持ちも考えられないようではダメ。この人も自分のことを思ってくれているのだから。

「共感できる」「共感できない」の双方が、ともに考える柱にしているのは、身分制度と一夫多妻制の問題である。「共感できる」の立場からは、身分の低い桐壺の更衣というたった一人の女性を愛し抜き、更衣の死後もその愛が変わらず、また更衣の死の責任を感じている帝の心情を読み取っていることが分かる。「共感できない」の立場では、最愛の人を結局は死なせてしまった行き過ぎた帝の愛情や、政務を怠ったり、他の妻の心情を思いやることのできない姿を批判的に見ていることが分かる。

◇更衣の母君に共感できる（四十八名）

・娘が帝から寵愛を受けることは母君にとってうれしと思われ、もし、僕の娘がこういうふうに寵愛されるとうれしと思うが、寵愛されることで非難されうられるので、病気になるってしまつて本當にうれしくもあり悲しくもあり、どうしようもない気持ちちが分かるから。

・娘のことを思い行動した母だったけれど、そんな大切な娘更衣を亡くしたときのショックとダメージはそうとうなもので魂が抜けたかのようになり、それを表すかのように家も荒れ果てか

わいそうだと思った。

・大切に育てた娘を夫の言うとおりに入内させたのに、そのせいで娘が死んでしまい、この世に愛する人が誰もいなくなつて自分の支えとなる人がいなくなつたコトの悲しさと、娘のかたみである光る君が幼くして母を亡くして、父からも愛してもらえないかどうかという不安な気持ち分かる。

◇更衣の母君に共感できない（七名）

・自分の娘が死んでしまつて悲しみに暮れるのは分かるけれど、もう少し帝のことを信用してあげて欲しいと思つた。特に光る君を帝がかわいがらないはずがないと思うから。でも、娘が死んだパニックと言つてしまえばちよつと分かる。

・しっかりした後見人がいなくまま宮仕えに出すのはあまりに後のことを考えていなさすぎると思う。光る君のことを心配に思う気持ちは分かるけど、帝のことも考慮に入れるべきだと思う。

夫と娘に先立たれ残された幼い孫のことを気にかけている、この不遇な女性には大多数のものが共感を覚えている。「共感できない」の意見の中に、娘を宮仕えに出すべきではなかったという趣旨のものが見られたが、これは生徒達が、当時娘を宮仕えに出すということに一門の繁栄がどれだけ期待されているか、また現代でも言えることだが遺言というものがどれだけ生きている者に重みを持つものかということの理解が不十分であつたとも考えられる。授業でこの点についてあまり触れなかつたことは反省すべきことであるが、しかし、現代的な感覚からの批判としては当

得ている意見であり、これも時代性について考える一つの機会になり得るだろう。

◇弘徽殿の女御に共感できる (三十三名)

・ すぐく無神経な人に見えるけど、この人の身になると、このよ
うな行動をするのも当然なのかもしれない。それまで、何でも
一番だった自分が、訳の分からない女の出現によって帝から振
り向いてもらえなくなり、くやしと思う。それに、自分の第
一皇子がいるのに、光る君ばかりかわいがっているのを見たら、
もしかしたら、子供の地位まで入れ替わってしまうかもしれな
いと思うと、帝への怒りが更衣へと向かって結局は更衣を苦し
めたのだと思う。

・ もし私が弘徽殿の女御の立場なら、同じように管弦を奏でて楽
しんでいるかもしれない。さんざん放っておいて、いまさら妃
として更衣の死を悼めなんて言われても、勝手だなあとと思う。
弘徽殿の女御は帝の気持ちの方が更衣に移ってからというもの、淋
しかっただろう。でも帝の寵愛ぶりにはしまいは愛想をつか
せてその淋しさは更衣を憎むことに変わっていったんだろう。
一夫多妻制の悲劇…。

・ 当時の考え方から言っても、当然自分が一番愛されるべきなの
に後から来た自分より身分の低い女に夫（しかも帝）を取られ
たら、そりゃ悔しいと思う。なんかこの人が一番感情が素直で
分かりやすいし、人間らしい気がする。

◇弘徽殿の女御に共感できない (二十名)

・ 更衣の死が今だ帝の心が悲しみにくれているのにそのことを無
視しているから。もし、弘徽殿の女御が帝を優しくいたわって
あげたら、きっと帝の気持ちは弘徽殿の女御の方に向いていた
かもしれないと思う。

・ 帝の更衣に対する溺愛ぶりを妬み憎らしく思うことは誰にでも
あることかもしれないが、自分の愛する人が悲しんでいるにも
かわからず管弦の遊びなどで騒いでいるなんて最悪だから。

・ 自分の愛する夫が悲しんでいる時にぎやかに楽器を演奏する
のはちよつと無神経だと思う。それでも弘徽殿の女御からし
てみれば強力なライバルが減ってうれいんだろうか。それにし
ても昔の女性の男性（夫）に対する愛情は本当に深いしその分
恐ろしい。

◇弘徽殿の女御については、どちらとも言えない (六名)

・ この時代、宮中の女の人は帝に愛されるか否かがすべてだった
はず。権力がある家の娘であればあるほど、そのために育てら
れた感があるのだろうし、それ相応の辛さもあつたはず、そう
やって今まで築いたものを足元から崩すような桐壺の更衣に好
意をもてなくても、責めることはできないと思う。仮にも結婚
して子供まで持った相手が他の人をこの上ないほど愛している
姿を喜んで見ないのは当然のことだと思う。なんだかせつない
人です。

・ 帝を夫に持つ身分の家で育てられたのだから、気位が高い人だっ
たと思う。だから更衣が現れるまで一番愛されていたのに、

その愛が急に全く無くなったら、私が弘徽殿の女御でも更衣を憎むと思う。でも私だったら、更衣が死んで暗くなっている夫がたとえまだ更衣のことを愛していても慰めてあげると思う。

「源氏物語」では完全に悪役として描かれている女性であるが、生徒達の約半数が共感を示した。教材本文で弘徽殿の女御に触れているのは僅かであり、この人物についての詳細な解説もなかったため、授業で口頭による説明が多くなったのだが、それが生徒には以外と印象に残ったようである。二年時での学習を一番想起させたからかもしれないが、弘徽殿の女御を一人の女性、一人の母親として見た場合、必ずしも幸せな人ではないと感じられたのだろう。また、生徒の意見の中に、帝の妻となるべくして育てられた女性の境遇に触れているのが見られ、時代性を十分考慮していると思われる。

「共感できない」とする立場には、弘徽殿の女御が帝に対する愛情や思いやりが欠けていることを指摘するものが見られたが、これらの生徒の中には、以前に学習した「大鏡」での中宮安子と対比しているところがあったようである。

(2) 〈第3次〉での論述の分析

〈第2次〉で出された生徒の意見をB4プリント1枚(表裏印刷)程度にまとめ、それらの意見を参考にさせて「あらためて考えさせられたこと」について論述させた。ここでは、三名の生徒の意見を抽出して分析する。

【A】この時代の風潮や価値観を全てくつがえした桐壺帝の更衣に対する深い愛情は、更衣が亡くなったあとでさえも強く感じられる。周囲のことが見えなくなるぐらいに深く愛してしまつたため、更衣が身分が低いということで他の女御から妬まれるのだろうけど、この話は当時では考えられなかつた帝が身分の低い女性を愛するということと、その更衣が他の女御から妬まれて死んでしまうという悲劇が、きつとこの当時の人々にとつてすごい斬新で興味深い話だつたはずだと思う。それを書いた紫式部はすごい人だつたんだろう。

それにこの話に出てくる桐壺帝も更衣も、更衣が現れたために全然帝に愛されなくなつた弘徽殿の女御も悲しみやせつなさや不満、憎しみといった感情をもつていたし、更衣の子供の光源氏も本当に作られた物語の中の登場人物といった感じが全くしないのは彼らが悩み、苦しみ、喜び、感動を受けたりする人間らしい行動や感情を表す時がふんだんに色々な場面に出てくるからだろう。この話がすごく現在でも人気がある理由がほんの少し分かつた気がします。それと桐壺帝に対しても光源氏に対しても思つたことは、どちらも更衣の母君や自分のたくさんの妻といった女性たちをとても氣遣っているし、心配しているところが優しいなと思ひました。すごく楽しかつたです。

この生徒は、登場人物の心情・生き様というのをかなり具体的にイメージしながら作品を読み深めていつたと思われる。作者

紫式部の作品構成力にも触れており「源氏物語」という古典作品の文学的価値を自分なりに見いだすことができています。

【B】現代では一人の人を大好きになつて、その人が死んでしまふようなことがあれば、かなりのダメージとショックで落ち込んでしまふだろうと思うけれど、話の中の時代では一夫多妻制だったのだから、多くの妻の中の一人が亡くなり、もちろん悲しいけれど、源氏物語での悲しみよりは軽いような氣もする。それでも桐壺帝の悲しみ方はすごかつたと思う。悲しくて、氣を紛らわせたくて、話を聞きたくて、仕事もしなくて、世の中自分以外いなくて、魂の抜け出たナマケモノの様な状態になつていたのだろうと思う。それについて共感できるといえばできる。多くの妻の中でそれだけ特別に更衣を愛していたのだというの分かる。プリントもらつて（皆の感想の）皆もやっぱり同じような感じを受けたのだなと思つた。前も書いたけど、やっぱり弘徽殿の女御のやつたことについてはなかなか共感できるし、氣持ち的にもよく分かるよな氣がする。

この物語は、それぞれのキャラが自分の思つていたことなどを行動に強く表し、それを見た人達の感想とで話ができているよな氣がした。

この生徒は、現代と当時の価値観の違いを意識した上で、登場人物の個性を把握できたと思われる。特に桐壺帝の心情について

は、他の生徒の自分と同じ立場から出された意見を参考にしてより深く考えていったようである。

【C】帝と更衣の恋は現代でなら皆から祝福されていたのではないかと悔しく思います。一夫多妻という制度を除いて言えば。あの状況では物語通りに更衣が死ぬか、世が変わるかのどちらかが起こつていたように思います。物語の中には一人一人の感情が書かれてるので、その一人一人の各対人に対する氣持ちや動作など、このまとめを読んで自分自身に置き換えて考えてみると共感できる点が多くあることに氣が付きました。あとから考えればいくつか筋道はあつたと思います。一つ一つの選択で枝別れをして時世は進んでゆくのだと思います。だから大きく見ると、いつの時代にも自分に正直に生きるか、それともその氣持ちを抑えて生きるのかをうまく切り替えたりすることが必要だつたように思われます。このことは現代の私達にも必要なことだと思えました。だから、「帝の嘆き」はその一人一人の氣持ちと行動のバランスが対人とのバランスをも偏らせてしまつたのだと思います。

この生徒の意見は、非常に総括的なもので、「源氏物語」に描かれてある世界をまさしく一つの典型例とみなし、自分たちの生き方・現実というものが、どんなふうにして成り立っているのかを認識できていると言える。それも、登場人物の立場に自分を置き換えて考えてみるという試みをしたからこそ、見えて来たのである。

5 考察

本来、私たちは文学を読む際には、自分たちの生活経験と照らし合わせながら、共感したり時には批判的に読み進め、さらに実際には体験できないことを想像を加えながら読み進めたり、知識として体験することをしていくはずである。

しかし、生徒の実態は、自分の生活経験の枠を越えて文学作品の中から新たな問題を探る、異質なものを見いだすという意識が希薄である。それだけでなく自己流の勝手な解釈、つまりは読み手がいい、読み落としをしているものすら出て来ており、生活経験の乏しい彼らに作品を深く読み込むということは期待できない状況にある。

そんな彼らに今回の試みは、自分たちがそれまであまり気にも留めなかったことに気づかせ、考えさせる機会になったと言える。自分が想像もしなかった考え方や自分と正反対の考えを示した意見を目にした生徒たちは、改めて作品に向き合い、自分の考えを改めたり深めたりすることができた。その際の生徒たちの読みの傾向として顕著なものに、

- ・ 多様な人間関係のなかでの、個人の心情把握
- ・ 時代性を考慮に入れた、現代の自分たちとの対比を試みながらの読み深め

が見られた。文学、しかも古典作品を読むのであるから当然と言えば当然なのだが、それでも彼らにとっては今まであまり経験したことのない読みの体験だったようである。

なぜ、そのような読みが可能になったのか。その要因として考えられるものを挙げてみる。

《Ⅰ》 時代背景・人間関係などを中心とした情報の取得

教科書に載せられている本文は「源氏物語」という膨大な作品のごくごく一部である。申し訳程度の作品解説が付いてはいるものの、それだけでは登場人物が置かれている状況や、その作品を生み出した当時の価値観を知り得ない。そこで参考になりそうなものを引用しながらの資料集を作成した訳だが、これが功を奏した。もちろん、ただ渡しただけならあまり意味は無かったと思うが、授業の際に必ず持参させて、ことあるごとに登場人物の関係を把握させたり、教科書本文と対応するところを確認させたりする作業を入れることによって、指摘されたところはもちろん、それ以外の情報にも目を向けるようになっていった。

また、弘徽殿の女御の分析のところでも触れたように、二年時に学習した内容を十分に想起させたことも大きな要素である。本文にも解説にも弘徽殿の女御について十分に触れられていないため、生徒達は自己の学習体験に「情報」を求めざるを得ず、それがかえってこの人物を理解する上で深まりを見せたと言える。

作品を読む際に、どれだけ具体的なイメージを膨らませることができるといことは大きな問題であるが、その手助けとなるはずの情報を意欲的に、自己のものとして取得し得ることの重要性がこの結果に示されている。

《Ⅱ》 他の生徒の意見提示

「みんなそれぞれの意見を見るなんて小学生以来だったので、

なんかとつてもおもしろかったし、こういう学習もいいなあと思
いました。」

これは、一人の生徒の論述の最後に書き加えられていた意見で
あるが、初めに予測した以上に、生徒達は自分以外の意見を見る
ことで触発されたようである。講義形式の授業では、やむを得ず
受け身的になり自分の意見を明確に意識することさえ無い場合が
ある。また、仮に自分の意見を持ち得ても、果たして自分の考え
でいいのか悪いのかを判断する機会が保証されないこともある。
それはつまり、曖昧なままに作品を読み流すことになり、自分の
読みを自覚し、自信を持つという機会もないことである。

生徒達は、《第2次》での論述をする際に「やむを得ず」自分
の意見をまとめねばならず、それは結果として自分の読みを自覚
する機会となった。自分の読みがあるからこそ、同じようにして
出された他者の意見にも真剣に向き合うことができ、同じような
立場からの意見には安心とともに、より深く考えているものを評
価・参考する姿勢が生まれ、異なる立場から出された意見には、
驚きとともに自己の内省が促され、自分の意見を転換あるいはさ
らに発展させようとする姿勢が生まれた。

おそらく生徒達は、この体験が「おもしろい」と感じたと思わ
れる。つまり、「思考する」ことの体験が乏しかった彼らには実
に新鮮なものだった、ということである。

この二点については、逆に言えば、私たちの日ごろの授業の問
題点を指摘されているのであり、この実態に対して、私たち指導
する側が課題としなければならないのである。

おわりに

この研究授業を終えて、ねらいがほぼ達成されたことはもとよ
り、生徒達が楽しみながら「源氏物語」を学習したということが
一番の成果であった。それは逆に、生徒達が楽しく学べる機会を
私たち指導する側が日頃十分に保証していないことを示すもの
もある。

目まぐるしく動く世相の中に生きているのは、生徒も私たちも
同様である。私たち自身も、自己をとりまく問題をしっかりと見
つめて行く必要があると痛感している。

主な参考文献

- ・『源氏物語の女性たち』秋山虔著 小学館ライブラリー3
- ・『源氏物語読本』秋山虔・桑名靖治・鈴木日出男編 筑摩書房
- ・『古典文学解釈講座第1巻 源氏物語一』菅野雅雄監修 古典
文学教材研究会編 三友社

(広島県立府中東高等学校)